劇団ＴＨＥ屋久☆座

２０１９年夏公演

ミンナノウタ
（小杉谷三十年目の約束）

作　松本　淳子

主な登場人物

晴男　（古川健太郎）五十代後半　安房出身十七歳で小杉谷に入り集材の仕事から始めて伐採、運材、そして機関車の運転までこなす。無愛想であるが筋を通す頑固者。閉山後は自ら会社をつくり枯損木（土埋木）搬出と植林を行いずっと小杉谷に関わり続けている。今回は小杉谷まで歩けない人達を運ぶ役を買って出た。

敏夫　（　リーマン・F・近藤　）正江の夫、由美の父、安房出身　戦後職を求めて一旦は大阪に出たが屋久島に戻って小杉谷に入った。はじめは集材手伝いだったがそのうち全体を取り仕切る伐採夫の一人になった。ヤクスギを伐ることで戦後の復興と屋久島の経済的発展に寄与しているという誇りを持っていたのだが、そのうち時代は高級木材の需要の低下と環境保護運動の高まりにシフトしていった。自身もチェーンソーによる白蝋病を発症し山を下りてからは病院通いの日々を過ごしていた。小杉谷は彼にとっては懐かしくもあるが、同時に苦い思いもこみ上げる場所である。その後屋久島の自然が評価され世界自然遺産に登録されたが、手放しで喜ぶことができない鬱屈した想いを持っている。

正江　（松本淳子）　屋久島出身、小杉谷に嫁に行けば食うには困らぬということで、当時集材作業員だった敏夫と見合い結婚をした。その言葉通り、特に結婚を機に伐採夫になった夫の給料は他の作業員よりも高額であった。そのお蔭で閉山後は由美を始めとする子ども達を島外の学校へ出すこともできた。しかし五十歳そこそこで夫である敏夫が病に倒れ働くことができなくなってしまった。現在正江は地元の食堂の手伝いなどをしながら夫を支えていて、面倒見の良い快活な性格のため閉山後も屋久島に残った人達の相談相手として慕われている。焼酎を飲むと「生きているうちにもう一度小杉谷に行きたい」と語る夫の願いを叶えてやれる最後のチャンスだという思いで参加を決めた。

由美　（竹之内幸）四十代　正江の娘、小杉谷で生まれて閉山時は中学生　閉山後家族は安房の職員寮に入るが、自分は島外の美容学校で学び、現在は大阪で美容師になっている。このイベントの為に帰郷した。

栄子　（井坪美紀）四十代　集材夫だった父が作業中に小杉谷で死亡した後も、母は独身寮の賄い手伝いをして栄子と弟を育てた。そして閉山後は母の生まれ故郷である宮崎に親子三人で引きあげた。母は小杉谷に辛い思い出しかなかったようで今回のイベントに誘っても来ると言わなかった。しかし父の思い出の場所を今一度自分の目で見ておきたいと一人での参加を決めた。

吉村　（坂下千恵美）小学校教諭の道子先生の姉。道子は小杉谷が初任地であった。閉山後若くして病気に倒れた。今回はイベントの知らせを受けた双子の姉が道子の写真アルバムを持って参加した。

参加者

永綱　（永綱哲治）　小杉谷の元住民・電気技師
西田　（西田順一郎）小杉谷の元住民・保線係
春子　（内田清美）　小杉谷の元住民・亡くなった夫が伐採夫
屋富　（屋冨祖克己）小杉谷の元住民・伐採夫
多喜　（小林律子）　屋富の妻

スタッフ

音楽　日高昭代
舞監　北山裕子
営業部長　鞆和美
製作　宮崎真代
音響　松田幸代
照明　楠瀬ふみこ

第一場

開幕ベルの後に「三々五々の歌」が流れる。やがて歌がフェードアウトすると幕が上がる。

♪三々五々の歌♪

一、三々五々の雨の後
　ひかり燦々ふり注ぐ
　誘い　誘われて
　三五三五と歩み行く

　ここは　屋久島　小杉谷
　雨は降る降る　ひと月に
　三十五日　こりゃ魂がるね

二、三々五々に集い来て
　ひかり燦々身に受けて
　誘い　誘われて
　三五三五と働けば

　ここは　屋久島　小杉谷
　山の稼ぎは　ひと月に
　三十五日　こりゃ魂がるね

三、三々九度のさかずきに
　ひかり燦々映しだし
　誘い　誘われて
　三五三五と道を行く

　ここは　屋久島　小杉谷
　夫婦暮らしは　ひと月に
　三十五日　こりゃ魂がるね

幕が上がり切ったところで録音したナレーションが流れる。

音源「時は２０２０年十月　天気は薄曇り　気温二十度くらい　場所は荒川登山口」

晴夫と昌人が登場、昌人はファイルを見ながら段取りを確認。

昌人　晴夫さん、ぼく、ドキドキしてきました。
晴夫　なしてや？
昌人　だって今日は特別な日、なんですよね？
晴夫　そうじゃっけど、なんも昌人くんがドキドキすることはなかよ。
昌人　だって昨夜遅くに電話がかかってきて、課長が急用ができて鹿児島に上がることになったって。
晴夫　庄司くんも今日のことは楽しみにしておったじゃけっどな。
昌人　「昌人よ、かつて、ここに住んでいた人達にとっては、明日は大切な日なんだから、おれの代わりにくれぐれもしっかり、頼むぞ」って。
晴夫　任されたわけじゃな。
昌人　それで慌てて資料を読んで、予習をしてきたんです。
晴夫　勉強熱心じゃが。
昌人　ですから「おれたち公務員は税金や協力金という人様のお金を預かって、それで事業をしているんだから、何事もきちんきちんと正確に遂行しそれを記録するのが仕事なのだよ、わかっているよな？」
晴夫　ん？
昌人　課長の口癖です。
晴夫　庄司君は小杉谷でまっすぐに育った男じゃからな。野球もうまかったぞ。
昌人　はい、その小杉谷出身の課長のためにも、僕は今日気合入れて頑張ります。（両ほほをぴしゃぴしゃと叩く）
晴夫　おいはトロッコの準備ばすっから、ここはよろしく頼むよ。（と下手に退場する。）
昌人　えーと、今日のこのイベントは「小杉谷小・中学校校歌」がきっかけとなって開催されるにいたった。うん。（一人相槌）営林署小杉谷事業所が閉鎖、小中学校が閉校になって三十年、その三十年の長きに渡り忘れ去られ歌われることがなかったひとつの歌が今ここに蘇ったのである。（うん。）「ヤクスギ伐採」をめぐって普段はあまり仲のよくない上屋久町と屋久町、営林署と環境省が世界自然遺産に登録されてからようやく「屋久島の自然を守る」というところで歩み寄り手をつなごうとしている、と……うん完璧！（ラジカセに合わせて歌って）われら生まれて故郷を愛すこの山　この谷　この川　この水　豊かに厳しき故郷を愛す……うん、完璧。

晴夫が下手からやってくる。

晴夫　おい、昌人君トロッコの荷台に弁当も積むって言ってたよな？
昌人　はい、お願いします。

晴夫　そうすると敏夫兄を乗せるところが狭くなるから、コンテナがあると良かじゃけっどな。

昌人　あ、向こうにあるんで後で持って行きます。

晴夫　頼んだぞ。

昌人　はい。

晴夫　皆年は取っているけど山ん衆は気が荒いから、くれぐれも気をつけて、な。

昌人　え、ええ？

晴夫が下手に去るが、後ろ向きで戻って来て

晴夫　大丈夫、誰も昌人君のことを取って食うわけじゃなかから。

昌人　ですよね、皆さん鬼じゃないですもんね。

晴夫　屋久島の山には鬼はおらん、じゃっど山ん神や山姫はおっとやけどな。（と退場）

昌人　その山の神のお祭りだってんで、旧暦九月十六日の今日を選んだわけですよね？

（晴夫はもういないので独白）うん、完璧。

バスのエンジン音とクラクション、ドアの開く音が聞こえる。

昌人　あ、次のバスがようやく来ましたね、っと。（ファイルを繰りながら）えっと一号車が本部設営部隊と役場職員でもう行ってると、さっき来た二号車が宮之浦方面からで、その人たちも出発しました、と。で、三号車が、あぁ、栗生方面からだ。うん、完璧。

第二場

舞台奥から次から次へと人が降りて来る。その度に昌人は「お疲れ様です」を連呼する。

永綱　着いた〜、ようやく着いた〜。

昌人　（長綱に）お疲れ様です。

西田　あ〜〜、懐かしいにおいがするなぁ。

昌人　（西田に）お疲れ様です。

永綱　ヤクスギの匂い、三十年ぶりにヤクスギの匂いだよ、なあ？

西田　ああ、懐かしいな、この匂いがおいは好きやったとよね。

昌人　（先の二人に）あ、あのあちらへどうぞ。

春子　（長綱に）安房からの道は随分きれいになっていましたよね。

昌人　（春子に）お疲れ様です。

永綱　うん、前はガタガタの砂利道で尻がボンボン浮き上がって難儀したもんな。
春子　ええ、ええ、そうでした。
西田　（戻って来て）さすがは世界遺産だか何だかになると違うねぇ。
春子　はい。
昌人　（多喜に）お疲れ様です。
多喜　（既に降りている春子を見つけてから夫に）父ちゃん、父ちゃんあの女がおる。
屋富　何て？
多喜　あのほら、ほら。いつも偉そうにしててさ、あたいが何か言うとすぐに「その言い方は違うんじゃありませんこと」と言ってくる、いけ好かない女が、ほら。
屋富　あ～ん？　気にすんな、昔のことじゃが。
多喜　だけど、さあ。
春子　（多喜達を見つけて）あ～ららららららら、お久しぶりです。
多喜　は、はいぃ。
春子　お元気でしたかぁ？
多喜　は、はいぃ。
春子　二人ともすっかり立派になって。
多喜　え？
春子　あなた達の元気な顔を見たら、わたしとてもほっとしました。
多喜　は、はぁ。
春子　まさか、忘れた？
多喜　いえ、いや、あの。
春子　あのことを覚えていないんですか？
多喜　あ、あのこと？　え、何だろうか？　（と屋富に）
春子　（屋富に）約束したじゃありませんか。
屋富　あん？
春子　サクラが咲いたらまた会いましょうって、ねえ？
多喜　あんた！？
屋富　いや、いや、おいはそんな。
春子　え？　違いました？　あら、わたし誰と約束したのだったかしら。

と言いながら、永綱と西田のところに行って同じように尋ねる。

春子　わたしと約束したのはあなたでしたか？
永綱　いいや。
春子　あなたでしたっけ？
西田　違う、違う。

春子　最近こういうことがよくあるんです。
多喜　まあ皆年を取ると誰だって、忘れっぽくなるよ。
春子　いえ、息子や息子の嫁さんはまだ若いですよ。それなのにいろんなことをどんどん忘れていくんですもの。本当に困るんです。
一同　……？
永綱　おい、あれ敏夫さんじゃ？
西田　そうだよ、班長だよ。
永綱　乗ってたんだな。
屋富　いやぁ、病気で出られんって聞いたけど……。
多喜　元気そうで良かったやん。
敏夫　お前が後ろの席に乗せるから出口から遠くて難儀するがよ。
正江　あんた、ここ危ないからゆっくりゆっくりでいいからね。
由美　父ちゃん、ここにつかまったらええんちゃう？　ここ、ほら手につかまっとき言うとんねん。
敏夫　（由美に）うるさい！
由美　はあ？　（と正江を見る）
正江　……右手には力が入らんのよ。（気にするなということを表情だけで伝える）
敏夫　（正江に）うるさい！

昌人が椅子を持ってくる。

昌人　敏夫さんですよね、課長から聞いています。
正江　（椅子に）あ、ありがとう。
昌人　（敏夫に）お疲れ様です。
敏夫　おいはまだ疲れちょらん、こんなんで疲れてたまるか。
由美　（昌人に）ごめんね。
昌人　いえ。
正江　昌人くん、今日は世話になるね、ありがと。
由美　おおきにね。
昌人　は、はあ。
正江　（先に降りた人たちに）皆さん、お久しぶりです。
永綱　正江ちゃん、じゃね？
正江　はい、あの頃はお世話になりました。
春子　同じバスに乗ってた？
由美　一番後ろの席に、はい。
多喜　ああ、由美ちゃんか？

由美　はい、多喜子おばちゃん久しぶりです。
多喜　すっかり大きくなって、ねえ？　（と春子に）
春子　こういう時は、すっかりきれいな娘さんになってって……いうんじゃなかったでしたっけ？
多喜　うん、そうじゃね。
西田　敏夫さんも元気そうで……。
永綱　前に倒れたって聞いたけど、今は大分よさそうじゃなかか、ねえ？　（と他の人に同意を求める）
春子　（敏夫に）その身体でわざわざ来てくれたのは、約束を果たすため、ですよね？
敏夫　何の話だ？　（と正江に）
正江　……？

昌人は**ラジカセの「ラジオ体操」のスイッチを入れる。**

昌人　あのぉ、皆さん。良かったらこんなのもありますので。

ラジオ体操第一の音楽が流れる（途中からはセリフが入る）。昌人は椅子など運んで往復する。皆は何となくラジオ体操をしながら以下の会話を交わす。

多喜　正江さんも色々大変だったろうね？
正江　いえ、わたしは何も大変なことなんか。
永綱　ずっとこの島に残っちょった？
正江　はい、あたい達二人とも島の出身なもんで。
永綱　ああ。
多喜　残った人達はきつかったろう？
正江　……。
永綱　他には誰が残ってた？
正江　はい、寺田カズ叔父、椎葉伝三郎さんとこ、福元さんの兄弟もいっぱい残ってましたよ。
屋富　懐かしいなぁ。
正江　でも、男ん衆は皆早くに、若か頃の無理がたたったのか、亡くなって。女子ん衆も腰やら膝が痛いっちゅて、今日は皆さん来られんって……。
春子　敏夫さんは約束してたから、約束していたから今日来たんですね。
一同　……？
西田　敏夫さんがいないと物事は始まらんって、学校のピーティーエーもそうじゃったもんな？

正江　今日はトロッコに乗せてくれるって、役場ん衆が言ってくれたから。
敏夫　こんな格好になって情けなかこっちゃ。
永綱　そんなこと言わんで、伐採の人達は重いチェーンソーを扱って、よっぽど無理をしたんだから……。
西田　うん、そうじゃよ。
敏夫　振動病でほら指の先っぽまで真っ白になって、物は掴めんし、腕は利かんし、いつも耳鳴りがして、頭まで痛くてよ。

昌人が通りかかって敏夫の話を聞いて

昌人　もしかして、それが白蝋病ってやつですか？

と敏夫の手をとってさする。若干戸惑う敏夫と周りの人々。

永綱　兄ちゃん、こん人はな、重か機械ば担いで山ん中を走っておったんぞ。
多喜　それが堪えたんじゃな。
敏夫　伐採の組で生き残っちょるのはおいだけやから、どうしても今日は参加してもらわんと恰好がつかんって、役場、お前んとこの親方から頼まれたからよ。
永綱　昔から「山の神まつり」の挨拶は班長だった敏夫兄がしてたからな。
敏夫　（間）じゃっど、体が利かなくなったら、班長も挨拶もなか。（と昌人の手を振り払う）

昌人は弁当運びを再開する。

春子　何を言っているんですか、命あっての物種ですよ！
正江　何？
春子　生きていさえすれば、楽しいことのひとつやふたつ位はあるって。
正江　ひとつかふたつ……だけ？
春子　いえいえ、みっつ、よっつ、いつつ、むっつ、ななつ、やっつ？
敏夫　まあ、よか、おいがこんなんなったの自業自得、太か木ば伐ったからじゃ？
正江　父ちゃん、今日はそのことは言わんって約束したはずじゃろが。
敏夫　おいは約束なんかしとらん、お前が勝手に決めたんじゃろが。

全員の動きが一瞬止まる。昌人が**「ラジオ体操」の曲を止める。**

正江　すみません、聞き流してやってください。（と皆に謝る）
敏夫　なしてお前が謝っとや？！
由美　父ちゃん、やめや。
正江　来られただけでも有難いって思わなきゃ、ねえ？（誰にともなく）
一同　うん。（と大きく頷く）
敏夫　こん衆は昔から気楽なもんじゃ。誰にもおいの悔しさがわからんとや。
正江　わかった、わかったから、もう、ね。

栄子が下手からやって来る。

栄子　……由美ちゃん？
由美　え、栄子ちゃん？　同じバスに乗っとったん？

他の面々は汗を拭いたりストレッチの続きをしたりの後上手側に座る。

栄子　二号車、わたしは宮之浦方面からのバスだったから。
由美　宮之浦から？
栄子　そう、こっちには親戚いないからホテルに泊まったのよ。
由美　ホテル？
栄子　うん、ほら昔、国民宿舎だったところ、今はすっかりきれいなホテルになってた。
由美　栄子ちゃん相変わらず、べっぴんさんで変わっとらんね。
栄子　え～？　由美ちゃんこそ。
由美　今日は誰に会えるかって楽しみにして来たんだけど……。
栄子　ねえ、向こうにも人がいっぱいいたから見に行ってみる？
由美　うん、行こう。

由美と栄子が退場する。

永綱　今のは、あれじゃなかか？
西田　あの後家の娘だ、確か。
春子　伊藤さんの娘さん、すっかり別嬪さんになって。
永綱　そうだ、旦那を亡くしてからは独身寮の賄をしてた、あの後家の娘、な？
西田　若い男にとっては最高よ。
屋富　飯もうまければあっちの方もうまいってもっぱらの評判じゃったもんな。
多喜　あんた！
屋富　噂じゃ噂、人から聞いた話。

由美と栄子が皆の前を通り過ぎる。

由美　庄司兄ちゃんあっちにいるかな？
栄子　行ってみる？
由美　うん。

正江　あの二人、三十年前の中学時代に戻っちょる、なあ父ちゃん。
敏夫　おいかて戻りたかよ。
正江　戻ろうやないの、あたいはもう一遍あの頃の父ちゃんに会ってみたかよ。
敏夫　ふん、無理じゃ。
正江　ああんもう、今日はそげな後ろ向きのことは言わんで！　そうだ良いこと考えた。
敏夫　何じゃ？
正江　今日これから愚痴や不平不満、人の悪口を言う度に百円の罰金を取るからね。
敏夫　あよー、この女子は、わずかばっかしかないおいの年金から罰金ば持って行くってか？
正江　はい、早速百円。

とうてい山に登る格好ではないが足元だけスニーカーの吉村久美子が登場する。そこにいる人々が一斉に彼女見る。そして互いに知っているかどうか確認するような風である。

一同　お～お！
敏夫　あん女子は誰や？
正江　あんた声が大きい。（とたしなめる）
永綱　えらい都会風じゃな。色も白かし、なぁ？
春子　でもどこかで見たことがあるような……。（懸命に思いだそうとする）
永綱　営林署のお偉いさんの娘じゃろかい？
西田　なしてそげな人が来るか、来るわけなかろ。
春子　そうですよ、営林署のお役人にとっては2～3年だけの赴任地、通りすがりの仕事なんですもの。
多喜　あたい達にとっては、生活の場じゃったけどな。
永綱　そりゃ、そうだな。

昌人が戻って来たところをつかまえて。

正江　なあ昌人くん、あん女子ん人は誰じゃったかね？

昌人　え？　誰がですか？
正江　ほら、あの。（と久美子を）
昌人　え、僕に聞かれても知りませんよ。
永綱　（無音で）なら、聞いてこいや。
昌人　え？
春子　（永綱の言葉を通訳）なら、聞いてこいや！　ですって。
昌人　（久美子の側へ行って）お疲れ様です。
久美子　今日はお招きいただいてありがとうございます。本当は本人が来るべきなのでしょうが、なにせかなわぬ事情がありまして。
昌人　はい。
久美子　両親もまた高齢という已むに已まれぬ事情がありまして、その代理として今日はわたくしがお邪魔したわけでございます。
昌人　はあ。
久美子　二十五年前のことでした。
昌人　え？　二十五年？
久美子　はい、ちょうど二十五年になります。
昌人　あ、あのぉ。（と名簿を広げながら）三十年です、ここが閉山して今年で三十年ですよ。
久美子　そうでしたね。道子が帰って来て五年後、私と道子が二十五歳の時のことでしたから。
昌人　！　と、いうことは五十歳？

敏夫達のところへ走って行き

昌人　五十歳です、あの人。
多喜　あっら、若作り。
春子　化粧がお上手。
正江　昌人君、歳なんかどうでもいいから誰なのか名前、名前を聞いて。

久美子のところへ戻って

昌人　あ、あの、もしよかったらお名前を？
久美子　宮田、いえごめんなさい吉村です。旧姓が、吉村、吉村久美子と道子です。

昌人が再び敏夫達のところまで行き

昌人　旧姓吉村久美子さんと道子さん、五十歳です。

結局吉村が誰だかわからない様子。そこへ晴夫が戻って来る。

晴夫　やあ皆さん、久しぶりじゃね、元気じゃったか？
春子　ああ、晴夫さん？
多喜　晴夫さんって、あの組合の？　（屋富に）
屋富　うん。
永綱　（晴夫に）今も小杉谷で木を運んどるって？
屋富　案内を送ってくれたのはあんたじゃった？
晴夫　案内を出してくれたのは役場の庄司くんと光明くんじゃよ。
多喜　庄司君と光明君って、野球部で活躍した二人じゃったなかったっけ？
春子　そうです、そうです。
多喜　今二人とも役場に行っているの？
正江　ええ、でもそもそもは晴夫さんがね、三十年振りの同窓会をやろうって言って町や営林署に掛け合ってくれたのは役場の庄司くんと光明くんじゃよ。
屋富　昔から組合にはずいぶん世話になったけど、今日も晴夫さんが……そうか。
晴夫　皆さん、今日は遠くから来てくれて、ほんにありがとうね。
多喜　いや、こっちこそ、おおきにな、今日は本におおきに。
永綱　屋久島が世界遺産になったって聞いて、おい達はようやく枕ば高くして寝られるようになったんだから。
昌人　え？　枕を高くして、ですか？　ええ？　（訳がわからない）
永綱　それまではずっと、何だかんだ言っても肩身の狭い思いばしてたもんな。
昌人　なしてですか？
西田　そうそう、世界遺産になってあの大岩杉がテレビに映った時にはびっくり魂がった。
春子　縄文杉っていう立派な名前でねぇ。
多喜　すっかりみんな立派になって。
春子　（多喜に）本当に皆立派になりました。
多喜　こないだはなチラッとだけど小杉谷の学校の門が映ってたよ、なあ父ちゃん？
屋富　お陰でおれは、若いころにあそこにいたんだぞって、胸張って言えるようになったんだ。
永綱　（独白のように）三十年経って、ようやく、うん、ようやくじゃ。（いいことを思いついた様子であるが、遠慮も含めながら）なぁ、皆で万歳三唱をしようや。
西田　万歳、万歳三唱？
春子　万歳を、三唱するのですか？

多喜　万歳三唱・・・しようや。
永綱　な？
一同　うん。
永綱　我らが小杉谷、世界自然遺産、ばんざーい、ばんざーい、ばんざーい。
全員　ばんざーい、ばんざーい、ばんざーい。
昌人　世界自然遺産になったのは、小杉谷じゃありませんよ。（きっぱりと）
一同　え？　（ばつが悪い様子）
昌人　皆さん、積もる話もあるでしょうが、それは歩きながら……しませんか。
永綱　そうだな、そうしようみんな。
昌人　（リュックから手作りの小旗を出して）では皆さん、参りましょう。
長綱　ちょ、ちょ待ってくれや。この行事は三十年振りの同窓会っちゅうことやからやっぱり校歌ば歌わんとな。
正江　そうじゃね、皆で気持ちを合わせて仕事ばした時にいつも、あの校歌が流れちょったもんね。
春子　小杉谷のことを思い出すたびに、あの校歌が頭の中にぐるぐると蘇るんですよ。
多喜　立派な校歌ですもんね。（と春子に）
春子　立派な校歌ですもん。（と多喜に）

昌人が大急ぎで**ラジカセ**を持って来て。

昌人　あぶない、あぶない、忘れるところでした。（と言って**スイッチ**を入れる）

由美と栄子が走り込んでくる。

由美　あ、うちらの声だ。閉校記念に録音したんだったよね。
栄子　そう、出来上がってきたら赤いペラペラなレコード。
由美　ソノシート！
栄子　そこに歌がどんな風にして録音されているのかって、皆でお日様に透かして見たりしたよね。
由美　そうだ、そうだったね。
栄子　道子先生がオルガンを弾いてくれて、男子が声がでないからって何回も何回もやり直しをさせられて、ね。
久美子　あ、あなたたちは？
由美　え？
栄子　あ、みっちゃん先生？！
由美　みっちゃん先生、お久しぶりです。嬉しい。

栄子　体を悪くしたって聞いたけど、良かった、すっかり元気になって。
久美子　道子は妹です。
由美　え？
久美子　双子の妹です。
栄子　じゃ、みっちゃん先生は、どこに？
久美子　道子はここには最後の二年、いや正確に言ったら一年半ですか……それだけしかいられませんでしたが、閉校記念の校歌の伴奏を務めるんだと喜んでいました。あなたたち（と胸に抱えていた包みを抱きしめる）聞かせてください、その校歌。

無伴奏で二人が校歌を歌う「皆さん」は退場する。歌を聞いた後に久美子が退場。舞台明転。

由美　かあちゃん、うちが父ちゃんをトロッコに乗せようか？
敏夫　由美はうるさいから嫌じゃ。
由美　なんやの。
正江　いいや、良かよ、あんたは友達と一緒に行きなさい。あたいも後から追いかけるから。
晴夫　敏夫兄行こうか？
敏夫　お前がトロッコの運転をすんのか？　（晴夫に）
晴夫　おいの会社のトロッコじゃもの、他に誰がおっとや？
正江　あんた、晴夫さんがいつも土埋木ば積んで運んでいるトロじゃよ。
敏夫　おいは晴夫の運転するトロッコには乗りたくなか。
正江　あんた、何を（言って）今更……。
敏夫　おいはこん衆の世話にはなれん。
正江　なしてそんなこと、昔の仲間なんじゃろうが……。
晴夫　敏夫兄が乗るって聞いたから、ちゃんと保線もしたがよ。こないだの大雨で土砂が流れたところにも小石ば入れて、ガタをなくしたから、な、乗ってくれや。
敏夫　じゃっで……。
正江　あんたこう言ってくれてるんじゃから、つまらぬ意地を張らんで乗せてもらって、なぁ？
敏夫　意地なんか、意地なんか張っとらん。
正江　なら、ありがたく乗せてもらって、あたいも後ろばついていくから。
敏夫　え、お前は一緒に乗らんのか？
正江　当たり前よ、歩けん人を乗せるために用意してくれた物なんじゃから。
晴男　よかよ、正江さんも一緒に乗ったらよかが。
敏夫　なあ、そうじゃろ？

正江　ええ、でも。（あまり気乗りがしない様子である）
昌人　敏夫さんは一人じゃ寂しいんですよね？
敏夫　寂しい？　寂しいなんて、そげなこつあるか。
昌人　誰だって一人になったら寂しいですよ。それが当然です。喧嘩する相手もまた夫婦ですもんね。
正江　……。
敏夫　な、皆がそう言ってくれてるんじゃから、その気持ちを無駄にしたら罰があたるぞ、お前。（正江に）
正江　ふん、勝手なこと言って。（間）そうですか、じゃあ、あたいも乗せてもらっていいですか？（と晴夫に）
敏夫　それが良い。（満足）

正江が敏夫を支えてトロッコの方へ歩き出す。

正江　ちょっと待って。
敏夫　なんじゃ？
正江　父ちゃん、一回深呼吸をしようや。こんうまか空気ば吸って、ここいら（胸）辺りにある物（もやもや・わだかまり）を捨てて、胸ば張って、小杉谷へ行こう、な。
敏夫　お前こそ、そうやってガミガミ言う癖をどうにかせんかい。

敏夫と正江退場。

由美　うちの父ちゃん山芋を掘ってばっかりやろ。
栄子　いつもニコニコしてやさしかった印象しかないから……。
由美　白蝋病になって仕事ができなくなってから特に性格がねじ曲がってしもうたみたいや。せやけどうちに言わせたら、母ちゃんが悪い。
栄子　え？
由美　いつもああやって甘やかすから、父ちゃんはいい気になって、いばってばかりや。
栄子　おじさんは寂しいんだね。
由美　そりゃぁわかるけど、母ちゃんが父ちゃんをダメにしているような気がして。
栄子　でもずっと寄り添っている……由美ちゃんのお母さんは強いんだね。
由美　え、そういうのを強いって言うやろか？
栄子　小杉谷にいた頃、皆がうちの母ちゃんのことどんな風に言ってたか、由美ちゃんも知ってたろ？
由美　栄子ちゃんのお母さんは小杉谷一番の美人、おしゃれな人だって皆が噂していた

やん。

栄子　おしゃれ（複雑な笑い）……そうだね。父ちゃんが死んでから益々、派手になってな。

由美　……。

栄子　あのね。

由美　うん。

栄子　うちの母ちゃん、今も何人目かの、若い男と一緒に暮らしてるんよ。

由美　へぇ？

栄子　由美ちゃんのお母さんみたいに誰かを支えて生きるんじゃなくて、支えてくれる人をいつも捜している……一人では生きて行けん人なんだよ。

由美　……栄子ちゃん、覚えてる？

栄子　……？

由美　みっちゃん先生や遠崎先生が教えてくれたこと。

栄子　遠崎先生？

由美　……。

栄子　いつも励ましてくれた。

由美　……。

栄子　みっちゃん先生も。

由美　栄子ちゃん、みっちゃん先生と一緒に、約束したことも覚えてる？

栄子　……遠崎先生がいなくなった時？

由美　そう、三人で……ほら、風も吹くなり、雨も降るなりって。

栄子　え、由美ちゃん、違うよ。

由美　ん？

栄子　風も吹くなり、雲も光るなりだよ。

由美　そうや、雲も光るなり、やった。

二人笑いながら退場。

第三場

校歌の声が近づいてきて先ほどの一行が登場する。枕木の幅がバラバラなので歩きにくい様子である。

多喜　枕木の幅がいちいち違って歩きにくいけど、これが懐かしい、ねぇ？

永綱　昔はこうやって足下を見なくても、ひょいひょいと歩けたのに。（しみじみと）しかし生きているうちにまたこの道を歩いて小杉谷に行けるなんて……思わなかっ

た。なぁ？

西田　ほんにそうじゃ。

屋富　冥途の土産に良い物を貰った。

西田　ほんにそうじゃ。

昌人は先頭を歩く、そのうち突然久美子がいないことに気が付く。

昌人　あれ、吉村さんは？

皆が後ろを振り向く。

永綱　ありゃ、おらん。

屋富　さっきまではおったよ。

長綱　どうしたんだろうか？

春子　少し遅れてはいましたけどね。

昌人　ええ？　遅れているの知ってたんですか？

一同　うん。（同時に頷く）

昌人　ええ、知っていたら教えてくださいよ。

多喜　そんなこと言っても、ねぇ。

昌人　え？

西田　小便でもしに行ったんじゃなかろうか、なあ？

春子　まあ、小便だなんて、お下品な。せめてお小水とおっしゃって。

多喜　それぞれ事情というものがあるわけだから。

昌人　でも、あの人、ここ初めてなんですよ。

永綱　ああ、知ってるよ。少しここで待っていればじきに追いついてくるって。

昌人　そう、ですか、ね？

永綱　ああ。

昌人　じゃぁ、少し休憩にしましょうか。

皆それぞれ場所を確保して座る。春子が皆に飴を配る。

春子　飴ちゃんをどうぞ、いろんな種類がありますから好きな物を選んでください。

永綱　あ、おおきに。

西田　ありがとう、黒飴がよか。

春子　べっこう飴もありますよ、ミルキーも、サクマのドロップスも。

屋富　あんたは昔からよう気が利くな。

春子　（屋富に）やっぱり約束したのはあなたですよね？
多喜　（屋富に代わって）いえ、いえ、いえ、違います。それに飴ちゃんはうちも持ってきてるから。な、あんた。（と屋富に）
屋富　（ちょっと気まずい雰囲気を察知して昌人に）なあ兄ちゃんは、安房の人か？
昌人　（来た道を少し戻って）いえ、尾之間です。
屋富　尾之間、尾之間だってよ。
多喜　ああ、あたいも聞こえたよ。
西田　尾之間って温泉があるところじゃったね？
昌人　は、はい。
永綱　あそこの温泉は熱かったのを覚えちょるよ。ここの閉山が決まってから、皆で遠足に行ったんだよなぁ。
昌人　遠足、ですか？
西田　おい達は屋久島に行ったことなかったからよ。
昌人　え？　屋久島に行ったことないって、ここも屋久島ですよ。
永綱　小杉谷と安房しか知らんかったから。
昌人　……。
春子　お別れ遠足、バスを借り切って……そう、ちょうど今日のような遠足でしたね。あの時もわたし黒飴とべっこう飴を持っていきました。それと酢昆布。
多喜　酢昆布、あの赤い小さな箱に入った？
春子　そうです、そうです。
多喜　あの頃、購買でお菓子って言ったらそれくらいしか売ってなかったもんね。
春子　そうそう、たまにギンビスのアスパラガスが入った時は早いもの勝ちでしか買えなかった。
多喜　あれはうまかったなぁ、あとココナッツサブレ。
春子　でん六豆。
昌人　あの人道に迷ったりしていませんよね？　（と誰にともなく聞く）
多喜　迷う道なんかどこにあるの？
屋富　あ！　あん衆に山姫のことば言うたか？　（と昌人に）
昌人　え？
屋富　ああ。
昌人　な、何？
屋富　山姫のことをちゃんと教えちょらんかったとか？
昌人　ええ？　山姫って……？
屋富　山の姫よ。
昌人　もののけ姫のことですか、アニメの、それなら(知ってますよ)。
多喜　兄ちゃんは屋久島で生まれ育ったのに山姫のことを知らんとか？

屋富　（昔話をする口調で）長い髪の毛を垂らし赤い袴をはいた、それはもう美しか女子だっちゅう話だ。山の中で出会うとな、こう言うんじゃて。

多喜　（手持ちの物で山姫に変装して）なあ、こないだ約束したやろ、あたいと一緒に遊ぶって。

屋富　その言葉に釣られてふらふらとついて行ったり、スケベ心を起こしてにやけたりした途端にな。

多喜　もらった！　（と大袈裟に何かをつかむ真似）

春子　もらった！　（多喜と同じく大袈裟に同時に）

一同は春子のことを見ながら一瞬凍り付く？

昌人　（間髪を入れず）もういやだな、おどさないでくださいよ、皆さん……。

皆が笑う。

昌人　吉村さんが山姫に連れていかれたら……僕は、課長に怒られる。

春子　出世の道が断たれては何のために役場に入ったんだか。

昌人　どうしよう？

春子　そりゃぁ探しに行くしかないでしょうよ。

昌人　ですよね？

でもこのままこの人達を置いて行っていいものかどうか一瞬迷う

春子　大丈夫ですよ、私たちはここでじっとして待っていますから。ねえ、皆さん。

一同　はい。（と頷く）

昌人　じゃあ、すぐ戻りますから、ここを動かないでくださいよ。（と来た道を戻る）

永綱　あのよ、なして今日は学校の校歌のことば皆言いいよるんじゃろか？　案内の手紙、細か字で何て書いてあったんじゃ？

春子　誰かが「小杉谷小・中学校」の校歌を見つけたらしいですよ。

西田　何だそれ、校歌を見つけたって？　かくれんぼか？

屋富　もういいかい、もういいよってか？

西田　どこに隠れちょったってや？

春子　確か千葉かどこかの合唱団の人のところって……ねえ？　（とEに）

多喜　その人が学生時代に登山に来て、山小屋に泊まった時、天井板にここの校歌が書いてあって、いい歌詞だなぁってんで地図の端っこに書き写したんだってよ。

西田　山小屋に？

春子　それがね、七番まであったんですって。
永綱　ええ？　そんなに長い校歌ってあるもんか。
西田　こりゃ七不思議、七番不思議や。ぷふっ。
春子　本物の校歌は三番までだけど、誰かが作った、替え歌。
永綱　替え歌？
春子　誰がつくったの、あなた？　（屋富に）
屋富　いや、いや、いや。
多喜　いや、それだけじゃなくて、校歌は、堀田おじのところにも隠れていた。
永綱　堀田おじ？
屋富　堀田って、あの役場の仕事をしてた人かね？
多喜　そうだよ、堀田おじは皆が山をおりてからも後片付けや何やらで一年くらいここにいたらしいんだけどね、その堀田おじがある日、学校に残っていたいろんな物を燃やしていたらさ、ほら紙とかって重なってしまうとなかなか燃えないじゃない、そこで空気を入れるために竹の棒でこうやってひっくり返したんだって、そうしたらよ、ひっくり返した紙の一番上に出てきたのがなんと校歌の楽譜それも歌を作った人の手書きの楽譜だっていうんだから驚きじゃないか。それを見た堀田おじは「これは燃やしてはいかん」と思ってそっと懐に入れて、それでこの三十年間家の仏壇の引き出しに入れて置いたんだってさ。
屋富　すごいなお前、まるで見てきたように語るなぁ。
多喜　その堀田おじが「生きているうちにもう一度小杉谷に行ってみたかなぁ」って言ったのを聞いたのが、島の外から移住して来た若い人、その人達が協力して本日このような「行こうよ小杉谷ピクニック」になったんじゃって。
永綱　ほう、よう覚えちょんなぁ。（と感心する）
西田　われら生まれて故郷を愛す、って、よく歌ったもんな。
春子　学校の生徒以上に大人が喜びましたよね、あの歌が来たとき。
屋富　そん時の校長先生の挨拶をおいは覚えているぞ。
永綱　へえ、すごいなあんた。
屋富　ほらあん時おいはＰＴＡの役員をしとったから。
永綱　で、校長はなんて挨拶をしたと？
屋富　え？　校長先生、お願いします。（と多喜に）
多喜　えー皆さん、小杉谷小学校と小杉谷中学校は大正時代営林署の家庭教育所としてスタートしました。その後はふもとの学校の分校として、次の時代を担うこども達の教育のために日夜努力して来た甲斐があり、今ようやく分校から昇格し正式な小学校と中学校になったわけであります。正式な学校ができたのなら学校の象徴である「校歌」は必須、そこでわたくしは校歌を、それも他の学校に負けない立派な校歌をつくってくれる人を探して東奔西走いたしました。そこで出会いま

したのは福岡県柳川出身の歌人菅原杜子雄さんという方でした。わたしは屋久杉一本担いでその人のところにお願いにあがりましたところ快く引き受けてくれたわけであります。その詩を持って今度は鹿児島の音楽教育の第一人者であり元同僚でありました浜田久夫先生に頼みに行きました。そして今日この「校歌」が山を登って皆さんの元にやって来たわけであります。「われら生まれて故郷を愛す」という一流の作詞家作曲家につくって貰った一流の校歌です。そしてそれを歌うのは皆さんです。これから後、この校歌を心の支えにして皆さんにも一流の人間になってもらいたいと心から願う次第であります。

一同　おー。（と唸る）

西田　一流の校歌、一流の人間……か。

春子　われら生まれて故郷を愛す……ねぇ？

シンセの音が聞こえる、皆それぞれの思いにふける。

永綱　今でもここは雪がようけ降るんやろか？

春子　毎年冬は雪に閉じ込められて。

屋富　うん、難儀したもんなぁ。

多喜　雪ん中で見るシカがなぁ。

屋富　シカは美しか。

多喜　ああ。

西田　そん雪がようやく溶けて、川の音が大きく聞こえるようになると。

永綱　ふぅっと風が変わってよ、そこから山の中は途端に賑やかになりよった。

西田　なぁ、おかしなことじゃがよ。（春子を横目で見ながら）

永綱　うん？

西田　自分でもわけがわからんのじゃけどな。

永綱　うん？

西田　サクラがよ。

永綱　サクラ？

春子　サクラ？

屋富　そいがどがんしたと？

西田　いや、やっぱりよか。

永綱　何じゃ、話を途中で止めんなって。

西田　……うん。

永綱　……何？

西田　やたらと会いたくなってよ。

春子　ああ！　やっぱり！　（わたしに？）

屋富　（同時に）山姫にか？
西田　（春子に）違う、（屋富に）あほなこと言うな。
春子　それじゃ、誰に？
西田　（春子に）あんたとの約束はおいは知らん、だけど同じ釜の飯を食った昔の仲間に会いたくなるんだよな。
屋富　ああ、正直に言うと、おいもそうなんじゃ……。
永綱　ええ？
屋富　おんなじだ、サクラが咲くころになるとよ……なしてだか思い出すんだよな。誰かに会って語りたくなるのよな。
永綱　なんじゃ、お前もか？
春子　（長綱に）お前もか、ってことはあなたもそうなの？
永綱　……。
屋富　（前の自分の言葉の続きのように）小杉谷のこととか、あの頃のことをよ。
永綱　だけど、それっておかしなこと、だろ？　ありえないだろ、そんなこと。
西田　うん、おかしなことだ。おかしなことだけど、本当のことだし、それがここにいる皆がそうだってことも、おかしなことだ、な。
永綱　なしてなんじゃろか？
多喜　ヒカゲツツジだったらわかるんだけどね。
春子　ヒカゲツツジ？
多喜　あの花が毎年川沿いで咲き始めると、春になったなぁって嬉しかったもの。だけどなしてサクラなんだろう、ねぇ？
西田　じゃろう？

昌人と久美子がやって来る。

久美子　すみません、写真を撮っていたら遅れてしまって。
昌人　（久美子に）さっきのカーブのところから見える向こうの斜面は春になると満開の桜で埋め尽くされてそれはもう見事ですよ。
久美子　さすがは世界自然遺産の島ですね。
昌人　皆さん、そう言います。「さすがは世界自然遺産の島ですね、こんなにたくさんのサクラの木が残っている」って。
久美子　ええ。
昌人　特にここは縄文杉へのルートですし、白谷雲水峡の太鼓岩からもここのサクラが見えるんでね。
久美子　道子も生徒さん達と一緒に、みごとなサクラの景色を見たんでしょうね。
昌人　それはないです。

久美子　え？
昌人　三十年前、ここにサクラの木はありませんでしたよ、ねえ皆さん？
「皆さん」と呼ばれる人々は互いに顔を見合わせたりする。
久美子　サクラは、なかった、んですか？
昌人　ヤクスギを伐ったから、森に光が入ってヤマザクラがはえてきたんです。ここにいる皆さんがヤクスギを伐ってここをはげ山にしたからサクラが今花を咲かせているんですよ。
久美子　え、そうなんですか？　（と皆さんに）
永綱　え、そうなのか？　（昌人に）
一同　（同時に納得の）そうなのか。
昌人　それにサクラの寿命は六十年くらいなので、今がちょうど三十年だから、一番元気で勢いのある時なんです。今から三十年後、ここの風景はまた変わっているかも知れませんね。
間
多喜　なあ、みんな、今度は花見に来ようか、春、サクラの？
西田　ああ、そして皆で語ろうや、小杉谷のことをば。
永綱　ああ、そうしよう。
春子　これは、約束ですよね、サクラが咲いたら会いましょうという、これは約束、ですよね、ね、皆さん。
多喜　うん、これは、約束、だよ。
西田　ああ、これが、約束、だよ。
昌人　え、え？　どうしたんですか皆さん？
永綱　ありがとうな、兄ちゃんが良いことを教えてくれたから。
一同　うん。
昌人　え、サクラのことですか？
一同　うん。
昌人　ぼくは今日のイベントに向けて、ちゃんと予習をしてきましたから。皆さんにとっては特別な日、失礼のなようにと……はい。
春子　（久美子に）あなたも誰かと約束したんですね？
久美子　はい、わたしは道子に約束しました。
多喜　あれ、あんた、さっき持ってた、あれ（おそらく道子の形見）どうした？
久美子　……。

昌人　さあ、みなさんまた出発しましょうか？　今度は遅れないでくださいよ。
長綱　（昌人に）な、な、な。
昌人　はい？
永綱　兄ちゃんが一番後ろを歩けばよかとじゃなかか？
昌人　え？
屋富　そいはいい考えだ。
西田　それにその方が歌がよく聞こえる。
昌人　そ、そうですか、わかりました。それじゃこの旗は……？
永綱　あ、おいが持とうか？　ん？
昌人　じゃぁ……お願いします。
永綱　（皆に）来年の春は小杉谷でサクラの花見をするんじゃからな、いいかみんな元気に生きしちょけよ。
一同　おう。

全員が歌う「あああ日月のめぐり果てなく　歴史の流れはいかになるとも……」の歌詞がはっきりと聞こえる。舞台は暗転。
そのうちトロッコが近づいて来る音がする。

第四場

敏夫　おい、おい、ちょっと止めてくれ。
正江　晴男さん、すまんねちょっと止めてください。

トロッコが止まる。明転

正江　父ちゃん、いげんしたとね？
敏夫　尻が痛か、何がちゃんと保線ばしたじゃ、ほんのこて。
正江　どれ、ちょっと体ばこっちさめやっかよ。
晴夫　正江さん、少し休むか？
正江　尻が痛いって言うんで、ちょこっと、はい。

敏夫と正江が客席に向かう形になる。シンセサイザーの音が聞こえる。「三々五々の歌」
晴夫が敏夫達のそばへやってくる。

敏夫　おいかてよ（晴夫に）ここにおった頃は、自分の体と腕さえあればどうにでもやっていけるって、そう思っちょった。

晴夫　うん。
敏夫　誰に守ってもらわなくてもどうにでもやっていけるって。
晴夫　敏夫兄が皆の先頭に立って頑張ってくれちょったから。
敏夫　ふん、晴夫よ、お前の勝ちじゃ。
晴夫　……。
敏夫　な、晴夫よ、お前の勝ちじゃ、な？
晴夫　そげなこつ今更言うなって。
正江　そうじゃよ、人それぞれの人生なんだから勝ちも負けもなかでしょう。
敏夫　おいの負けじゃ。
正江　だからあんた、今更そげなこつば言うて何になるの。
敏夫　負けじゃ、ああ負けじゃ。
正江　だからそんなことを言って晴夫さんにからんで何になるの、自分がみじめになるだけじゃなかとね？
敏夫　みじめ？　お前はおいがみじめじゃって、そう思うちょんのか？
正江　晴夫さん、気を悪くせんでくださいね。
敏夫　お前は余計なことを言わんで黙っちょけ。
晴夫　敏夫兄がそうやって言うなら、ああ、おいの勝ちじゃ。
正江　晴夫さん？
敏夫　おいのこつば、笑っちょる、こん男は。
正江　もう、父ちゃんやめてくれ。
敏夫　なぁ、そうじゃろ、笑っちょろ、な？
晴夫　敏夫兄がそうやって言うなら、ああ、おいは笑っちょる。
敏夫　ほらな、やっぱりそうじゃった。なあ正江おいが言った通りじゃったろう？
正江　あんた、もういい加減にせんね。
敏夫　ふん。
正江　晴夫さんごめんね、堪忍してやってください。
敏夫　正江！　なしてお前はいつもそうやって謝っとか？
正江　じゃっで、今日は喧嘩をしに来たんじゃなかでしょうが。
敏夫　……。
正江　情けなか、本にあんたは情けなか。
敏夫　うるさい。
正江　そうやって毒をはいて人に嫌な思いをさせて、何が面白いとか？
晴夫　よかとよ、正江さん。おいは何とも思っちょらんから。
正江　……。
晴夫　敏夫兄は辛かとじゃから、そん気持ちはおいもわかるばって。
敏夫　わかってたまるか、勝ったお前に。

晴夫　おいも一旦は山を下りたじゃっど、またここさめ戻ってきたから世間のうるさか声を聞かんでも済んだ、ばって敏夫兄は色々言われたろう思う。

正江　山にいた時はよかったよ、父ちゃんたちが伐ったヤクスギが高級材として日本のあちこちで重宝されているって考えただけで、ほんにあたい達も鼻高々だったから。そいが、いつの間にか木を伐ることが悪かこつみたいに言われて。

晴夫　営林署の計画、国の方針ってやつにおいたちは振り回されっぱなしじゃった。

正江　ふもとの村の衆も木を伐って出せばそれだけ皆に金がまわるって歓迎してくれてたのがさ。

敏夫　おい達が山を下りたら突然掌を返しやがった。

正江　白蝋病で病院へ行けば、あん衆は補償ば貰ろうて働かんでよか暮らしばしとるって陰口ばたたかれて。世間は冷たいもんじゃ、ほんに。

晴夫　おいは前から言うておったやろが、ヤクスギ一本一本を大事に扱っていればまだまだ小杉谷は長持ちしたって。

敏夫　そうじゃ、その通りじゃ、だからお前の勝ちじゃ。

晴夫　じゃってその時は誰も耳を貸さんやった、おいはあん時敏夫兄のところへも、このままじゃこの山がだめになってしまうちゅうて、営林署のえらいさんに話しばしてくれって頼みに行ったじゃが。

正江　そいをうちの人は断った、そげなこつ言ってる場合じゃなか、金になるうちに伐れるだけ伐って、閉山後島を出て行く衆にも金を持たせるんじゃって。

晴夫　なあ、敏夫兄よ。

敏夫　……。

晴夫　伐り散らかして、自分の体ば壊して、誰も感謝なんかしてくれんかった。逆に世間にも言われるだけ言われて……そうじゃろ？

正江　こん人は貧乏くじを引いたよ。

晴夫　そんなこつ。

正江　反対に晴夫さんは、今でも山を守り続けているって、こないだもテレビでやっておったね。

晴夫　あんなもん、一時の流行りじゃ。

正江　今じゃ伐採反対、自然を守れっておらんでいる衆のヒーローじゃもんね。

晴夫　正江さんよ、おいは伐採反対だとか、自然を守れだとか、そんなことはどうでも良か。ただ……。

正江　ただ？

晴夫　ヤクスギの弔いをしとるだけじゃ。

敏夫　ヤクスギの弔い？

晴夫　世間ちゅうもんがどんだけ浮気もんで、冷たいもんか、おいは子供ん頃からよう知ってる。病気のおやじを捨てておふくろは家を出て、おいはろくに読み書きも

できんじゃったから世間の飽きっぽさや冷たさは……人一倍知っちょる。

敏夫　……晴夫。

晴夫　世間は自分勝手で冷たかもんや、じゃっども敏夫兄おいはよ、そんな自分勝手で冷たか人間、冷たか世間にはなりたくなか。なぁ敏夫兄もそうじゃったろう、自分のことは後回しにしていつも他の衆のことば先に考えてやっとったろ。

敏夫　若か時分。

晴夫　うん。

敏夫　ノコとナタを持って初めて太か木の前に立った時に感じたあん気持ちを、チェーンソーを持った時からおいは忘れちょった。いや忘れようとしとった。忘れなかったら何百年も何千年も生きてきた太かヤクスギにチェーンソーの歯を入れることなんかできんじゃろが、ええ？

晴夫　おいたちの道具はノコとトビとナタじゃったよな？！

間

敏夫　おいやって……。

晴夫　……。

敏夫　おいやって、このまま世間を恨んで人生ば終わりたくはなか。

正江　あんた？

敏夫　おいやって、本当は自分が伐ったヤクスギをちゃんと弔ってやりたかもん。

晴夫　敏夫兄よ。

敏夫　うん？

晴夫　尻の痛かのもいくらかようなったか？

敏夫　……。

晴夫　小杉谷まであと少しじゃっで。

シンセサイザーの音が聞こえて来る。「三々五々の歌」

曲にかぶせてのセリフ、徐々に遠ざかっていくトロッコ

正江　若い頃のあんたは本に男前じゃった。腕も太くて後姿が逞しくて、なあ、祝言の日のこと覚えとる？　あたいが、嫁入り道具と一緒にトロッコに乗って山を登って来た時あんたは小杉谷の橋の手前で待っていてくれて……。あたいの方へ近づいて来たと思ったら、突然箪笥を、重い箪笥を背中に背負って、あの橋を渡ったんだよね。その時からあたいはどんなことがあってもこん人について行こう、って、そう思ったんよ。

第五場

セーラー服姿の由美と栄子が「もういいかい」「まあだだよ」を繰り返しながら舞台上を移動する。

由美　もういいかい？
栄子　まぁだだよ。
由美　もういいかい？
栄子　まぁだだよ。
由美　もういいかい？
栄子　まぁだだよ。
道子　（久美子）もういいかい？
由美　まぁだだよ。
栄子　まぁだだよ。
由美　もういいかい？
栄子　もういいかい？
道子　もういいよ。
由美　みっちゃん先生！
栄子　みっちゃん先生！
道子　二人とも、喜んで。さっき校長先生から電話がありました。
由美　野球部の？　男子達？　庄司兄ちゃん、遠崎先生に会えたんですか？
道子　……。
栄子　それで遠崎先生は帰って来るって？　いつ帰って来るって言ってました？
道子　おそらく夏休み明けには……。
栄子　先生、本当？
道子　ええ本当よ。
栄子　良かった。これで一安心。

慌てて由美と栄子が手を合わせてお参りをする。

道子　あなた達が毎日山の神様にお参りしたから通じたのね。
由美　それにしても遠崎先生は大人なのに、やることが子供みたい。
栄子　由美ちゃん、そんなこと。
由美　だって、そうでしょう？　庄司兄ちゃん達が野球大会の決勝戦に出られなかったのは遠崎先生が悪いんじゃなくて小杉谷中学校に優勝させたくない大人達が、意

地悪をしたからなんだよ。

道子　由美ちゃん、それは。

由美　前もふもとの村の運動会に出たら、私たちが一等賞を取り過ぎるって、もう山猿達は出てくるなって言われたじゃない。

道子　（少し笑って）そうね、あなた達は皆、運動神経が抜群だもの。

由美　みっちゃん先生、だからって意地悪されてもいいの？

道子　それは……。

由美　みんな本当は知っているくせに、自分たちが意地悪されたり差別されていること。

道子　差別、だなんて。

由美　わたし悔しいの、何かを頑張っても山の生徒だからっていう理由で不公平なんだもの。

栄子　由美ちゃん、それじゃ遠崎先生はどうしたらよかったの？

由美　どうしたらいいかなんて、わたしにはわからないけど先生は私たちにいつも言っているじゃない。山の子供たちはいつも足元ばかり、下を向いている、でもちゃんと顔を上げて生きていけ、って。

栄子　遠崎先生はわたしにも「父ちゃんを事故で亡くしたからって、小さくなって生きることはないんだぞ、母ちゃんのことを色々言う人がいてもお前は正々堂々と生きていいんだぞ」って。

由美　それなのに自分が逃げ出して、わたしたちを置き去りにして……。

栄子　遠崎先生が学校をやめて山口の家に帰ったと聞いた時、わたしも思った、先生にも、捨てられたって。

道子　栄子ちゃん、でも戻って来るよ、遠崎先生は。大丈夫だからね。

栄子　……うん。

風の音が聞こえた後、三人は空を見上げる。

道子　風もふくなり、雲も光るなり

栄子　雲がきれい。

由美　端っこがキラキラと光ってる。

道子　生きている幸せは、波間のカモメのごとく縹緲（ひょうびょう）と漂い

栄子　……？

道子　生きている幸福（こうふく）はあなたも知っている、わたしもよく知っている。

由美　生きている幸福（こうふく）？

道子　花の命はみじかくて、苦しきことのみ多かれど、風も吹くなり、雲も光るなり。

由美　苦しきことのみ多かれど？　苦しいことが多いけれどっていう意味？

道子　この詩を作った林芙美子という人はね、子供の頃から行商して歩く親についてあ

ちこちをまわり、いじめられたり差別されたり、時には道に迷って怖い思いをしても、泣きながらでもいつも顔を上げて前を向いて生きた人なの。先生はこの人の強さが好きなの。

栄子　由美ちゃん、わたし。

由美　なに？

栄子　この森に約束する。

由美　約束？

栄子　わたしも強くなりたい。

由美　うん、わたしもこの森に強く生きていくって約束する。

道子　それじゃ先生も。

由美　え、先生も？

道子　先生も強くなりたいから……一緒に、いいでしょう？

由美と栄子が顔を見合わせて相談する風。

道子　ね？

栄子　うん。

由美　（同時に）うん。

三人が小杉谷に向かって叫ぶ格好。

三人　わたしたちはこれからどんなことがあっても……。

三人に当たっていた照明が消えて、すぐさま舞台全体が明転。遠くで校歌のメロディが聞こえる。昌人達の一行がやって来る。

第六場

多喜　ここ、ほらここに床屋があったの覚えてる。

昌人　え？　こんな山の中に床屋もあったんですか？

西田　うん、白と赤の電気がグルグル回っちょったよ。

屋富　髪を切ってもらっている時にガラス戸の外をトロがガタガタと音を立てて通るたびによ、おやじの手が震えとったよな？

西田　そうだった、髭を剃ってもらっている時はもっと恐ろしかったぞ。

屋富　そのたびにラジオの音楽も聞こえなくなってな。

永綱　じゃ、じゃ。せっかく三波春夫が歌っちょったのにな。
多喜　『東京オリンピック音頭』を歌う♪
多喜　三波春夫は、あれも、ほら、あの……大阪の万国博覧会。
多喜　ああ、こんにちはの歌？
春子　三波春夫でございます。『大阪万博テーマソング』を歌う。♪……握手をしよう。

春子の手を握り返し皆もポーズを決めてストップモーション。

屋富　（陰ナレ）一九七〇年はおい達皆が山をおりた年だった。
昌人　皆さん着きましたよ。この橋を渡ったら学校です。

トロッコの音が聞こえて来る。

西田　あ、トロッコの音だ、トロが来る前においたちが先に渡ろうや。
一同　おう！

皆が校歌を歌いながら橋を渡って退場。トロッコが来る。

敏夫　おい、晴夫、晴夫。ちょっと止めてくれぃ。

トロッコが止まる。

晴夫　いげんしたとや？
敏夫　なあ、正江。ここじゃったろ？
正江　うん？
敏夫　さっき言ってた、祝言の日の朝……。
正江　うん、確かにここじゃよ。父ちゃん。いげんしたとね、危なかよ。

それでも諦めずに一人で歩こうとする敏夫。

正江　あんた、何がしたかとね？
晴夫　敏夫兄、今度はいげんしたとや？
敏夫　正江、おいはここの橋を、自分の足で渡りたか。
正江　あんた、そんな無理じゃよ。まっすぐ歩けん人がなしてこの橋ば渡れるの？
敏夫　おいはお前が言うように情けなか男じゃった。
正江　情けなか男でもなんでもよかとよ、ここを歩いて渡るなんて、危なかこつだけは

やめてくれ。

敏夫　心配ばせんで良か、心配ば、せんで、良か。

正江　いかん、やめちくり、父ちゃん。（としがみつく）

敏夫　命あっての物種なんじゃろ、おいは生きるんじゃ。（と正江を振り払う）

正江倒れる。

敏夫はふらつき、時に倒れながらもしっかり一歩一歩進む。敏夫ひとりに照明。

彼は自分を励ますかのように小杉谷小・中学校々歌を歌うが、歌詞の途中は「山仕事」をしてきた人間ならではの歌詞で替え歌になる。

静かに暗転。

「小杉谷小・中学校校歌」をアレンジしたピアノ曲が流れている間に登場人物全員が集合写真撮影のポジションにつく。明転。

昌人　それじゃ皆さん、記念写真を撮りますので、こちらを見てください。（とカメラを準備する）

遠くから由美と栄子と道子の声が聞こえる。（音源）

三人　わたしたちはどんなことがあっても、顔を上げて前を向いてまっすぐに生きていくことをこの森に、約束します！

全員がその声の方（客席後方上）を見て笑顔になった瞬間にシャッター音。同時に暗転。

それまでのピアノ演奏がやんで、オルガンまたはアコーデオンのような音色で『三々五々のうた』の前奏が始まる。

前奏が終わって歌が始まるタイミングで明転、既に全員が並んでいる状態。

歌を歌う。

歌の歌詞は次ページ。

「三々五々のうた」

一、三々五々の雨の後
ひかり燦々ふり注ぐ
誘い　誘われて
三五三五と歩み行く

ここは　屋久島　小杉谷
雨は降る降る　ひと月に
三十五日　こりゃ魂がるね

二、三々五々に集い来て
ひかり燦々身に受けて
誘い　誘われて
三五三五と働けば

ここは　屋久島　小杉谷
山の稼ぎは　ひと月に
三十五日　こりゃ魂がるね

三、三々九度のさかずきに
ひかり燦々映しだし
誘い　誘われて
三五三五と道を行く

ここは　屋久島　小杉谷
夫婦暮らしは　ひと月に
三十五日　こりゃ魂がるね

終幕